尾崎放哉選句集より

大正一三（一九三八）年、放哉は一燈園の先輩の世話を受けて、兵庫県西須磨の須磨寺大師堂の堂守となる。『層雲』に投稿を始めた頃からの自由律俳句に磨きがかかるのは、この時代である。

1 あすは雨らしい青葉の中の堂を閉める
2 一日物云はず蝶の影さす
3 友を送りて雨風に追はれてもどる
4 雨の日は御灯ともし一人居る
5 なぎさふりかへる我が足跡も無く
6 軽いたもとが嬉しい池のさざなみ
7 静もれる森の中をののける此の一葉
8 井戸の暗さにわが顔を見出す
9 沈黙の池に亀一つ浮き上る
10 鐘ついて去る鐘の余韻の中
11 炎天の底の蟻等ばかりの世となり
12 山の夕陽の墓地の空海へかたぶく
13 柘榴が口あけたたはけた恋だ
14 たつた一人になりきつて夕空
15 墓原路とてもなく夕の漁村に下りる
16 高浪打ちかへす砂浜に一人を投げ出す
17 雨に降りつめられて暮るる外なし御堂

18 昼寝起きればつかれた物のかげばかり
19 何も忘れた気で夏帽をかぶつて
20 ねむの花の昼すぎの釣鐘重たし
21 氷店がひよいと出来て白波
22 父子で住んで言葉少なく朝顔が咲いて
23 砂山赤い旗たてて海へ見せる
24 声かけて行く人に迎火の顔をあげる
25 蛇が殺されて居る炎天をまたいで通る
26 ほのかなる草花の香ひを嗅ぎ出さうとする
27 潮満ち切ってなくはひぐらし
28 空に白い陽を置き火葬場の太い煙突
29 むつつり木槿が咲く夕べ他人の家にもどる
30 いつ迄も忘れられた儘で黒い蝙蝠傘
31 蛙の子がふえたこと地べたのぬくとさ
32 何かしら児等は山から木の実見つけてくる
33 船乗りと山の温泉に来て雨をきいてる
34 あらしの闇を見つめるわが眼が灯もる
35 海のあけくれのなんにもない部屋
36 銅銭ばかりかぞへて夕べ事足りて居る
37 夕べひよいと出た一本足の雀よ
38 たばこが消えて居る淋しさをなげすてる
39 おだやかに流るる水の橋長々と渡る
40 空暗く垂れ大きな蟻が畳をはつてる
41 蟻を殺す殺すつぎから出てくる
42 雨の幾日かつづき雀と見てゐる
43 雑巾しぼるペンだこが白たたけた手だ
44 友の夏帽が新らしい海に行かうか

45 写真うつしたきりで夕風にわかれてしまつた
46 血がにじむ手で泳ぎ出た草原
47 昼の蚊たたいて古新聞よんで
48 人をそしる心をすて豆の皮むく
49 はかなさは燈明の油が煮える
50 刈田で烏の顔をまぢかに見た
51 落葉木をふりおとして青空をはく
52 からかさ干して落葉ふらして居る
53 傘さしかけて心寄り添へる
54 赤とんば夥しさの首塚ありけり
55 障子しめきつて淋しさをみたす
56 庭石一つすゑられて夕暮が来る
57 木槿が咲いて小学を読む自分であつた
58 藁屋根草はえれば花さく
59 今朝の夢を忘れて草むしりをして居た
60 鳩がなくま昼の屋根が重たい
61 マツチの棒で耳かいて暮れてる
62 栗が落ちる音を児と聞いて居る夜
63 夕べ落葉たいて居る赤い舌出す
64 自らをののしり尽きずあふむけに寝る
65 何か求むる心海へ放つ
66 大空のました帽子かぶらず
67 仏体にほられて石ありけり
68 足音一つ来る小供の足音
69 何かつかまへた顔で児が藪から出て来た
70 昼だけある茶屋で客がうたつてる
71 打ちそこねた釘が首を曲げた

72 烏がだまつてとんで行つた
73 昼ふかぶか木魚ふいてやるはげてゐる
74 妹と夫婦めく秋草
75 小さい火鉢でこの冬を越さうとする
76 心をまとめる鉛筆とがらす
77 仏にひまをもらつて洗濯してゐる
78 ただ風ばかり吹く日の雑念
79 二人よつて狐がばかす話をしてる
80 うそをついたやうな昼の月がある
81 酔のさめかけの星が出てゐる
82 考へ事して橋渡りきる
83 おほらかに鶏なきて海空から晴れる
84 山に家をくつつけて菊咲かせてる
85 しも肥わが肩の骨にかつぐ
86 板じきに夕餉の両ひざをそろへる
87 わがからだ焚火にうらおもてあぶる
88 傘干して傘のかげある一日
89 こんなよい月を一人で見て寝る
90 便所の落書が秋となり居る
91 竹の葉さやさや人恋しくて居る
92 めしたべにおりるわが足音
93 淋しいぞ一人五本のゆびを開いて見る
94 火ばしがそろはぬ儘の一冬なりけり
95 朝の白波高し漁師家に居る
96 草履が片つ方つくられたばこにする
97 島の女のはだしにはだしでよりそふ
98 今日も生きて虫なきしみる倉の白壁

99 黒眼鏡かけた女が石に休んで居るばかり
100 釘に濡手拭かけて凍てる日である
101 つめたい風の耳二つかたくついてる
102 お堂しめて居る雀がたんともどつてくる
103 降る雨庭に流をつくり侘び居る
104 のら犬の背の毛の秋風に立つさへ
105 人殺しありし夜の水の流るるさま
106 水たまりが光るひよろりと夕風
107 片目の人に見つめられて居た
108 紅葉あかるく手紙よむによし
109 公園冬の小径いづこへともなくある
110 大地の苔の人間が帽子をかぶる
111 お盆にのせて椎の実出されふるさと
112 姉妹椎の実たべて東京の雑誌よんでる
113 かへす傘又かりてかへる夕べの同じ道である
114 赤ン坊のなきごゑがする小さい庭を掃いてる
115 雀のあたたかさを握るはなしてやる
116 酒もうる煙草もうる店となじみになつた
117 灰の中から針一つ拾ひ出し話す人もなく
118 曇り日の落葉掃ききれぬ一人である
119 門をしめる大きな音さしてお寺が寝る
120 うで玉子くるりとむいて児に持たせる
121 かまきりばたりと落ちて斧を忘れず
122 黒い帯しつかりしめて寒い夜居る
123 師走の夜の釣鐘ならす身となりて
124 師走の夜のつめたい寝床が一つあるきり
125 雪を漕いで来た姿で朝の町に入る

126 女と淋しい顔して温泉の村のお正月
127 破れた靴がぱくぱく口あけて今日も晴れる
128 寒鮒をこごえた手で数へてくれた
129 落葉掃けばころころ木の実
130 犬をかかへたわが肌には毛が無い
131 かたい梨子をかぢつて議論してゐる
132 漬物桶に塩ふれと母は産んだか
133 渓深く入り来てあかるし
134 池を干す水たまりとなれる寒月
135 蜜柑を焼いて喰ふ小供と二人で居る
136 片つ方の耳にないしよ話しに来る
137 両手をいれものにして木の実をもらふ
138 女に捨てられたうす雪の夜の街燈
139 濠端犬つれて行く雪空となる
140 落葉拾うて棄てて別れたきり
141 こんな大きな石塔の下で死んでゐる
142 紺の香きつく着て冬空の下働く
143 あけた事がない扉の前で冬陽にあたつてゐる
144 きたない下駄ぬいで法話の灯に遠く坐る
145 冬川にごみを流してもどる
146 臼ひく女が自分にうたをきかせて居る
147 堅い大地となり這ふ虫もなし
148 ゆるい鼻緒の下駄で雪道あるきつづける
149 ふところの焼芋のあたたかさである
150 ひげがのびた顔を火鉢の上にのつける
151 にくい顔思ひ出し石ころをける
152 底がぬけた柄杓で水を呑まうとした

153　雪空にじむ火事の火の遠く恋しく
154　雀がさわぐお堂で朝の粥腹をへらして居る
155　犬よちぎれるほど尾をふつてくれる
156　節分の豆をだまつてたべて居る
157　刈田のなかで仲がよい二人の顔
158　花が咲いた顔のお湯からあがつてくる
159　歯をむきだした鯛を威張つて売る
160　人を待つ小さな座敷で海が見える
161　夕の鐘つき切つたぞみの虫
162　夕飯たべてなほ陽をめぐまれてゐる

[小浜時代]

過酷な労働とは縁のない須磨寺での生活は放哉の気質によく合ったが、寺院内の紛争のためにおよそ一〇か月しか続かなかった。須磨寺を出た放哉は、大正一四（一九二五）年、福井県小浜町の常高寺に落ち着く。

163　あたまをそつて帰る青梅たくさん落ちてる
164　剃つたあたまが夜更けた枕で覚めて居る
165　一人分の米白々と洗ひあげたる
166　時計が動いて居る寺の荒れてゐる
167　乞食に話しかける我となつて草もゆ
168　考へ事をしてゐるたにしが歩いて居る
169　雪の戸をあけてしめた女の顔
170　留守番をして地震にゆられて居る
171　臍に湯をかけて一人夜中の温泉である
172　かぎりなく蟻が出てくる穴の音なく

173　かたい机でうたた寝して居つた
174　蜘蛛がすうと下りて来た朝を眼の前にす
175　雨のあくる日の柔らかな草をひいて居る
176　とかげの美しい色がある廃庭
177　土塀に突かひ棒をしてオルガンひいてゐる学校
178　うつろの心に眼が二つあいてゐる
179　母の無い児の父であつたよ
180　淋しいからだから爪がのび出す
181　ころりと横になる今日が終つて居る
182　一本のからかさを貸してしまつた
183　朝早い道のいぬころ

貧乏寺だった常高寺での生活はまたたく間に終わり、放哉は荻原井泉水を頼って京都へ。大正一四（一九二五）年の七月から八月、関東大震災後に母と妻を失い京都で独居生活を送る井泉水のもとに身を寄せることになる。

184　山寺灯されて見て通る
185　昼寝の足のうらが見えてゐる訪ふ
186　宵のくちなしの花を嗅いで君に見せる
187　蜘蛛がとんぼをとつた軒の下で住んでる
188　蓬ひに来たその顔が風呂を焚いてゐた
189　旧暦の節句の鯉がをどつて居る

[小豆島時代]

大正一四（一九二五）年八月、放哉は井泉水の紹介を得て、小豆島に渡る。西光寺の奥の院南郷庵の庵主となった放哉は、酒と作句に明け暮れる。そして翌大正一五（一九二六）年四月七日、病没。享年は四一。

190 眼の前魚がとんで見せる島の夕陽に来て居る
191 いつしかついて来た犬と浜辺に居る
192 さはにある髪をすき居る月夜
193 漬物石になりすまし墓のかけである
194 すばらしい乳房だ蚊が居る
195 あらしの中のばんめしにする母と子
196 あらしのあとの馬鹿がさかなうりにくる
197 足のうら洗へば白くなる
198 海が少し見える小さい窓一つもつ
199 わが顔があつた小さい鏡買うてもどる
200 ここから浪音きこえぬほどの海の青さの
201 すさまじく蚊がなく夜の痩せたからだが一つ
202 とんぼが淋しい机にとまりに来てくれた
203 なん本もマッチの棒を消し海風に話す
204 山に登れば淋しい村がみんな見える
205 雨の椿に下駄辷らしてたづねて来た
206 叱ればすぐ泣く児だと云つて泣かせて居る
207 花がいろいろ咲いてみんな売られる
208 秋風の石が子を産む話
209 投げ出されたやうな西瓜が太つて行く
210 壁の新聞の女はいつも泣いて居る
211 鼠にジヤガ芋をたべられて寝て居た
212 盆燈籠の下ひと夜を過ごし古郷立つ
213 少し病む児に金魚買うてやる
214 風吹く家のまはり花無し
215 山は海の夕陽をうけてかくすところ無し
216 水を呑んでは小便しに出る雑草

217 花火があがる空の方が町だよ
218 一疋の蚤をさがして居る夜中
219 あけがたとろりとした時の夢であつたよ
220 おそい月が町からしめ出されてゐる
221 わが肩につかまつて居る人に眼がない
222 蓮の葉押しわけて出て咲いた花の朝だ
223 切られる花を病人見てゐる
224 お祭り赤ン坊寝てゐる
225 陽が出る前の濡れた烏とんでる
226 蜥蜴の切れた尾がはねてゐる太陽
227 お遍路木槿の花をほめる杖つく
228 病人花活けるほどになりし
229 朝靄豚が出てくる人が出てくる
230 迷つて来たまんまの犬で居る
231 すでに秋の山山となり机に迫り来
232 久し振りの雨の雨だれの音
233 都のはやりうたうたつて島のあめ売り
234 障子あけて置く海も暮れきる
235 あらしがすつかり青空にしてしまつた
236 淋しきままに熱さめて居り
237 淋しい寝る本がない
238 月夜風ある一人咳して
239 お粥煮えてくる音の鍋ぶた
240 一つ二つ螢見てたづぬる家
241 爪切つたゆびが十本ある
242 鳳仙花の実をはねさせて見ても淋しい
243 障子の穴から覗いて見ても留守である

244 入れものが無い両手で受ける
245 朝月嵐となる
246 秋山広い道に出る
247 口あけぬ蜆死んでゐる
248 せきをしてもひとり　（咳をしても一人）
249 墓地からもどつて来ても一人
250 恋心四十にして穂芒
251 なんと丸い月が出たよ窓
252 ゆうべ底がぬけた柄杓で朝
253 麦まいてしまひ風吹く日ばかり
254 今朝の霜濃し先生として行く
255 となりにも雨の葱畑
256 くるりと剃つてしまつた寒ン空
257 夜なべが始まる河音
258 よい処へ乞食が来た
259 雨萩に降りて流れ
260 師走の木魚たたいて居る
261 松かさそつくり火になつた
262 風吹きくたびれて居る青草
263 嵐が落ちた夜の白湯を呑んでゐる
264 寒ン空シヤツポがほしいな
265 蜜柑たべてよい火にあたつて居る
266 とつぷり暮れて足を洗つて居る
267 昼の鶏なく漁師の家ばかり
268 海凪げる日の大河を入れる
269 山火事の北国の大空
270 墓のうらに廻る

271　あすは元日が来る仏とわたくし
272　夕空見てから夜食の箸とる
273　窓あけた笑ひ顔だ
274　おそくなつて月夜となつた庵
275　小さい島に住み島の雪
276　名残の夕陽ある淋しさ山よ
277　故郷の冬空にもどつて来た
278　雨の中泥手を洗ふ
279　山畑麦が青くなる一本松
280　窓まで這つて来た顔出して青草
281　渚白い足出し
282　貧乏して植木鉢並べて居る
283　霜とけ鳥光る
284　あついめしがたけた野茶屋
285　森に近づき雪のある森
286　肉がやせてくる太い骨である
287　一つの湯呑を置いてむせてゐる
288　やせたからだを窓に置き船の汽笛
289　すつかり病人になつて柳の糸が吹かれる
290　春の山のうしろから烟が出だした

底本：『尾崎放哉句集』（彌生書房　一九九七年一二月二五日初版発行）『尾崎放哉全句集』（春秋社　一九九七年一二月一〇日第三刷発行）　元テキスト入力：j.utiyama　テキスト追加入力・編集・ＴＴＺ作成：浜野　智　青空文庫作成ファイル：　このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

この冊子は、青空文庫さんから、テキストデータをダウンロードしてオジャラが習字の手本として作成したので、連番がついております。俳句の読み合わせ会や、掲示板上での質問のやりとりなどでも、番号がついていると便利だと思うことも多いので、連番を消さずに、作成しました。自由律俳句に親しみたいという方で、ご利用になりたい方は、ご自由に印刷して、使ってください。なお、訂正や間違っている箇所等ございましたら、rica@ojara.netまでお知らせ下さい。